書道教師はクールな御曹司に甘く手ほどきされました

水田 歩
Ayumu Mizuta

Eternity
BUNKO

目次

書道教師はクールな御曹司に甘く手ほどきされました　5

書き下ろし番外編
試作―【墨痕鮮(ぼっこん)やかなる愛の軌跡(きせき)】　337

書道教師はクールな御曹司に
甘く手ほどきされました

序章　桜月に希うはあなたのこと

二十畳ほどの和室。庭と部屋を隔てる障子は開け放たれている。
紫紺の空には、白金の月。
月光が照らす先には、凛と立つ桜。寄り添う男女は、月と桜を愛でているように思える。
「あ……ん」
あえかな声が漏れ出る。
彼があぐらをかいた脚の間に、すっぽり収まっている彼女は生まれたままの姿。反対に男は服をしっかり着たままだ。
インモラルと淫靡、二つの要素が相まって、女は情欲を高めていた。
普段より素直に快楽に堕ちている彼女を、男は冷静に観察していた。……といっても、男が興奮していないわけではない。その証拠に、硬いモノが先ほどから女のヒップに当たって存在を主張している。女のうなじをくすぐる彼の息も熱い。
男が自分に欲情してくれているのがわかるのも、彼女が快楽に集中できている理由の

一つ。
通常ならば永久凍土のように凍っている体も、怯えという鎧で覆われている心も、今晩は柔らかい。……もしかしたら彼を受け入れられるのではないか、と彼女が期待するほどに。
けれど、男は彼女の快楽に専念していた。
乳房を下から捧げ持ち、二つの尖りを指で丹念に可愛がっている。女の、桜に向かって広げられた脚のあいまからはとろみのある汁が垂れて、男の服を濡らしていた。
彼がちゅ、と女の耳殻に唇を寄せると、彼女は身を震わせた。
「気持ちいいか？」
欲を滲ませた声が、女の耳に忍び込む。
男が自分に欲情してくれている。そのことが嬉しい。
「うん……」
「なりたい自分はなんだ？」
男が女の耳を食んで、耳孔にぺろりと舌を差し入れる。低く艶のある声音と、濡れた感触に、彼女の背骨から腰までぞくりとしたものが走る。身じろぎすると秘処から蜜がまたこぼれ落ちた。
「仁那？」

松代に催促されて、甘いもやで覆われた頭で考える。すると、はっきりとした答えが浮かんだ。

（決まってる。あなたを受け入れられること）

『わたしを抱いてほしい』と、今は言えない。けれどもう少ししたら言えるかもしれない。

そしてもう一つの望み『わたしを愛してほしい』については。

「言えない……」

女の眦から涙が落ちる。男は月に反射して輝く、その二筋を見てそっと呟いた。

「俺が手ほどきしてやる」

第一章　予約はまさか初恋の人？

「仁翔せんせぇー、さよーならー」

「はぁい、気をつけて帰ってねー」

日曜日の夕方。

袋田仁那は、教室である祖母宅から、最後まで残っていた生徒を送り出した後、伸びをした。

「お疲れ様、わたし！　明日からお休みですよー」

大学を出て八年、書道教師一筋。

仕事人間の自覚はあるが、やっぱり休前日はワクワクする。

……といっても。休みだからとなにか予定があるわけではない。

朝寝をたっぷりと楽しんだ後、ぐうたらしつつ家業の店番を手伝ったり。

祖母宅に出勤して、仕事の準備時間にあてたり。

恋人がいない彼女の休日は、大体そんな感じだ。

彼女は台所に向かうと、仕事の後の楽しみであるコーヒーを淹れた。

ノートパソコンを立ち上げ、ひとしきりネットサーフィンを堪能すると、最後に自身の教室のホームページを確認する。とはいえ、ガツガツ仕事する気はない。仁那のポリシーは、『コツコツ地道に、でも楽しく』である。

だが。

「え、嘘……！」

ホームページの問い合わせフォームから申し込みが届いている。その内容を読み進め、仁那はつい叫んでいた。

じっくり見直し、さらにはプリントアウトしてもう一度読んだ。

『拝啓　高坂流書道教室　仁翔先生』

――仁那は師匠であり祖母である高坂翔乃から、この書道教室を受け継いだ。
雅号は師匠の名から一字もらい、「仁翔」という――

『突然の連絡、失礼いたします。
貴教室の見学を希望いたします。希望日は、三月二十日十四時です。
ホームページを拝見したので教室はお休みと承知しておりますが、喫緊の事情があります。
まことに勝手ながら、ご助力願えませんでしょうか。
些少ながら、休日の賠償はさせていただきます。　敬具　松代武臣』

仁那はしばし、ぼうっとしてしまう。
どれくらい経ったろうか、ようやく頭が動き出した。
「ま、まさか。和登の親友のシロさん……？」
表示されている名前は、双子の兄、和登の親友で、仁那の初恋の男性と同姓同名だった。
……が、彼女は松代に会ったことはない。
写真も、とりわけ高校時代のものは兄が厳重に保管していて、見たことすらない。
なのに、恋をした。
「シロさん……」
仁那は出力した用紙を無意識に撫でながら、彼を知ったきっかけを思い出す。

兄の和登と松代は、高校一年のときに同じクラスになってからのつき合いだという。……ちなみに仁那は偏差値が足りず、和登と違う学校に通いたかったこともあり、自宅から近い女子高に通っていた。
『シロが学年で首席になったんだ。すげえよな！　さすが、俺の親友』
『シロがクラブで一年からレギュラーに選ばれた。数年ぶりだってよ！』
和登から、松代のことを聞かない日はなく。……いつしか松代にほんわりとした想いを抱くようになった。
仁那はさりげなく彼についての情報を収集しようとしたが、和登は人の感情に聡い。
妹が大切な親友を狙っていると思ったのだろう、じろりと睨まれた。以来、曖昧なことは教えてくれても、踏み込んだ個人情報については頑として教えてくれない。
他校の生徒が潜入できるチャンスの文化祭ですら、来るなと厳命されていた。
ある日、仁那はまだ見ぬ相手へのふくれ上がった感情に耐えきれなくなった。ストレートに『シロさん、彼女はいるの？』と訊いてみた。
いつもなら仁那の質問を警戒する和登であったが、そのときばかりは気の毒そうな顔で『あいつ、彼女ができた』と教えてくれた。
仁那の中で、なにかが破れたような気がした。

兄は呆然としていた自分の頭を撫でて、なにごとか謝ってくれていたようだった。
「……和登はなにも悪くないんだけどね。写真も見たことのない相手にのぼせるなんて、我ながら幼かったなー……」
だからと言って、初恋を否定するつもりはない。
仁那は旧友に再会したような懐かしい感覚で、もう一度予約フォーマットの内容を読み直した。
「三月二十日十四時……」
うっとりと仁那の目がカレンダーを彷徨ううち、ギョッとした表情になり、次いで眦も裂けよとばかりに目が開かれた。見学希望日は、なんと明日である。
「ど、どうしよう！」
パニックになりつつ、仁那は首をかしげた。
「……なんでシロさんが書道を習うの。しかも、『仁翔』に？」
現在、高坂流書道教室は一見さんお断り。
生徒の父兄の紹介かつ、兄の厳正な審査を通過しなければならない。
「テレビのほうなら、わからなくもないけど……」
仁那はＴＶバラエティ番組『教えて、先生！』で『カリスマ美人書道教師・紫藤瑞葉（ただし、どＳ）』というキャラクターとしても、書道を教えている。

もっとも、紫藤への申し込みはデート目的の男性ばかりなので、番組外でも教えてほしいと言われても受けつけていない。
仁那はうーんと腕を組んで唸った。
松代が書を習いたいなら、和登はもちろん知っているだろう。だったら兄から連絡がありそうなものだが。……そこまで考えて、仁那は「あ」と声を出した。
「確かシロさん、大学から海外に行ってるって……。それから今まで、ずうっと海外で仕事してるって、何年か前に和登が言ってたっけ」
そして、帰国するとは聞いてない。
だとしたら今回の見学を申し込んできたのは、まったくの別人だろう。
「神様、わたしの期待を返してぇ……」
などと呻きながら、しばらくテーブルに突っ伏してしまうくらいにはがっかりする。
……どれくらい落ち込んでいただろうか。
はああ。仁那はため息をつくと、もそもそと上半身を起こす。
「世界は広いんだもの。そっくりさんだけじゃなくて、同姓同名だって三人はいるよね。『あなたはわたしの初恋の人ではないので、お断りします』なんて、言えるわけがないよ……」
申込者にも書にも、失礼すぎる。だが、興味を失うには魅力的な名前すぎた。

念のため、機会があったら『松代武臣』なる人物に『あなたは和登の親友か』と訊いてみよう。

……質問するためには、件の人物に会う必要がある。

「まずは、松代（別人）さんに返信しよっかな」

仁那はいそいそとメールソフトを起動した。

『見学ご希望日が送信日時から七十二時間以内の場合、近々のため、返事が間に合わない可能性がある』旨をホームページの注意書きに記載してあるにもかかわらず、だ。

緊張から、何度も削除と訂正を繰り返し、ようやく送信できたのは、返信しようと決心してから一時間後だった。

「よし、送った。松代さん、すぐに気づいてくれるかなぁ。待たせちゃったよね。もしかしたら、もう別のところに決めちゃったかな？」

送った途端、悶々としてしまう。お断りメールが返ってきたら、大ショックである。

しかし杞憂だったようだ。

『無理を聞いていただき、ありがとうございました。明日はよろしくお願いいたします』

五分後にそんなメッセージが届いて、ほぅっと安堵の息を吐き出した。

けれど彼女は返事が来ただけでは、満足しなかった。

「掃除しなくちゃ！」

しかしその前に、同居している家族へ電話をかけた。と、いうよりはただ一人、過保護な兄へ言い訳である。

「あ、お父さん？　あのねっ、おばあちゃんち大掃除しなきゃいけないの！　だから泊まるねって、和登に言っておいて！　……え、いないの？　よかったぁ。じゃね！」

仁那は掃除道具を取り出し、呟く。

「門の周り、玄関から教室に至るまでと、トイレを綺麗にしておけばいいよね？」

実際のところ、清掃は毎日している。

しかし仁那は授業に関係ない台所や、祖母宅で泊まるときの部屋まで磨きはじめる始末。

さらには猛烈に身なりが気になり出した。

「スキンケアは局の人がうるさいから頑張ってるけど。化粧品も持ってきてて、助かったぁ」

……一見の客を迎えるにあたって、普段の彼女ならば、『松代なる人物は、わたしとこの教室が、己が習う場として相応しいか否かを判断するために、見学するだけである。決して袋田仁那という女を見に来るわけではない。むしろ、わたしのことなんかスルーしてほしい』くらいのスタンスでいるはずなのだが。

仁那は、両親から淡白で大人しいパーツを受け継ぎ、とても地味な顔だ。おまけに普

段の彼女は、ほぼすっぴんである。
小学生の生徒相手に着飾るつもりはないし、大人の生徒の前で美しくあろうとする気持ちはさらにない。にも、かかわらず。
「髪の毛どうしようかな。なにか使えるおしゃれな紐あったっけ？　……あ、額縁を壁にひっかける奴！　あれがいいんじゃない？」
毎月、一番早く提出してきた生徒のベストな作品（自己申告制）をパネルに入れて飾ってあげるのだ。額装すると、迷作が名作になる。そのための房つきの組紐が朱、紺、濃緑、紫と各色揃っている。
仁那は洗面所に駆け込むと鏡の前で髪に組紐をあてた。体を右に左に傾けて、紐の映え具合を確認してみる。
「緩く編んで前に垂らすとか？　……は！　書道教師の本分から逸脱した装いをしちゃだめでしょ」
万が一、松代の前で墨たっぷりの硯（すずり）の中に、髪が浸かったら。
仁那は想像してぞっとした。……気を取り直し、普段通り後ろで束ねるだけにする。
ようやく落ち着くかと思いきや、彼女は粗相なく初恋の人（と同姓同名なだけ）を迎えようと気張るあまり、思考がさらに暴走しはじめた。
「どうしよう、下着は今日着けてるのしかない……。洗濯して、乾燥機にかければ大丈

夫かな」
生徒が墨だらけになるので、洗濯機とお風呂はいつでもスタンバイＯＫだ。
服やタオルからふんわり薫（かお）るラベンダーの匂いを、松代は気に入ってくれるだろうか。
……そこまで考えて、さすがに妄想を暴走させすぎたと反省する。
「シロさん（と同姓同名なだけ）がメールを寄越したのは、見学の申し込みであって、デートじゃないから！」
パチンと両頬を引っぱたいた。
が、おたふくみたいになってしまっては大変だと、慌てて叩いた頬を撫でる。
……そのせいでかえって赤くなったが、仁那は気づかない。
「待って？　もしかしたら、わたし」
自分が着用しているのが、墨だらけでヨレヨレな作務衣（さむえ）であることに気がついた。
「シロさん（別人）の前で油断した格好なんて許されないんだから！」
勢いよく脱ぎ捨てた。
だが、まだ掃除が終わってないことを思い出して、慌ててもう一度着直す。
……風呂掃除をしながらシャワーを浴びて洗濯機を回している間、必死に肌や髪のケアをしてから、ネイルを塗って乾かす。彼女が寝ついたのは朝六時過ぎだった。

＊＊＊　松代サイド　＊＊＊

仁那が大奮闘を始める二時間前。

空港に降り立った松代は、迎えに来てくれた親友の和登と落ち合った。

「シロ！」

「クロ！」

久しぶりに再会した彼らはがしっ！　と腕をぶつけ合う。

二人は高校時代、名字から『白王子』『黒王子』と呼ばれて人気を二分していた。毎日、スカウトマンからの名刺と近隣の女生徒からのプレゼントで、彼らの鞄は満杯になった。

……それから十二年。

三十歳の彼らは、新緑の若芽のような初々しさを手放した代わりに、自信と色気をまとっていた。

シルバーグレーのスリーピースにワイシャツの襟元を緩めた松代と、頭の先から爪先まで真っ黒な和登。はからずも白銀と黒の対比となった二人の姿は、まるで一幅の絵のようだ。

「相変わらずイケメンだな、クロ。ガン見されてるぞ」

「お前こそ隠し撮りされてたぞ、シロ。気をつけろよ？」

談笑しながら歩いていく二人に見惚れて、通行人に衝突する女性が後をたたない。

……数十分後。

二人は和登が予約していた、空港近くのホテルに入っている創作料理の店に落ち着いた。

次々と美味しそうな料理がテーブルに並べられる。松代と和登は旧交を温めるべく盃を交わした。

「創業なん百年だかの菓匠『まつしろ』の次期当主と、俺達の腐れ縁に乾杯！」

「三百年だよ、書道具屋の五代目若旦那！　……俺達の変わらぬ友情に乾杯」

笑みを浮かべつつも松代は元気がない。その理由を和登は知っている。

三人兄姉弟の末っ子である松代は伝統の重みを嫌い、家業を継ぐつもりはなかった。

しかし、社長になるはずの姉が取引先の小豆農家へ嫁ぐと言い出し、おまけに夫（予定）にくびったけで遠距離結婚を断固拒否。

味を継いでくれる長兄は根っからの職人気質で、やはり社長になるのを嫌がっている。

自分が家業を継ぐしかないのだと思い定めた松代に、大問題が発生した。

それが、当主であるための条件の一つ。

『商品名は、毎年正月に当主の筆で小売店に通達しなければならない』というもの。

おまけに署名は花押。

「シロ、お前。見た目と中身なら、最高のCEOになれるのにな」

和登が心底同情する。

松代は容姿端麗、頭脳明晰なうえに運動神経も抜群。和登によれば、腹黒と激情を、洞察力と温厚さで覆い隠しており、義理堅い。

「ああ。俺もそう思う」

松代がうつむく。

社交もそつなくこなし、女性からは夜の豹、男性からはハンターと評される男。

彼には自信があったし、運やコネに金もある。

「なんで、よりによって唯一苦手なことを求められるんだろうなー……」

親友の言葉に、松代は頭を抱えたくなった。自分に唯一ないもの。それが字の美しさである。

「子供の頃は逃げ回っていればよかったんだがな……」

自分でも読めないほどの悪筆は、努力と周囲の人々のおかげで他人の目に触れることをなんとか免れた。

だが、家を継ぐことを決意した松代には、立ち向かうしか選択の余地がなかった。

……とは言うものの。

一人で解決できる自信などないから、思い余って親友に相談した。

「それで、和登。頼んでた書道教室の件、どうなった？　個人授業でも構わない。例えば、TVでよく見る紫藤――」

松代は最後まで言い終えられなかった。

「だめっ、アイツは却下！」

フーッと猫が毛を逆立てるような和登の剣幕に、松代は面食らった。

友の顔をしばらく眺めているうちに、やがてハハンと思いつく。

親友の生暖かい目に気づいたのか、和登が微妙な笑みを貼りつけた。

「紫藤よりさ、俺の妹はどうよ。小学生相手に書道教室やってるんだが、評判いいんだ」

「いや、いい」

松代があっさり断ると、和登は慌てふためいた。

「ヲイ！」

「書道具屋のクロなら、いい伝手があると思っただけだ。面倒かけたな、ネットで探す」

そう言うや否や、タブレットを取り出す。

元々、気になっていたところはブックマークしていた。申し込みフォーマットに記入した。送信する前に松代は再度、吟味する。

何度も確認したうえで、とある教室へ見学予約を申し込んだ。

一時間ほど経過した頃、松代のスマホが振動した。和登に断って画面を確認する。
「よし。早速、明日の見学をOKしてもらった」
満足そうな松代に、和登が呻く。
「あああ。せっかくシロが時任と別れたって聞いたから、今度こそ妹をお前に紹介しようと思ってたのに！　……まァ、なるようにしかならないか」
ぶつぶつ言っている親友を尻目に、松代は盃を呷った。

＊＊＊

翌日。
初恋の男性と同姓同名の『松代武臣』なる人物が見学に訪れる時刻の、十分前。
そわそわ、そわそわ。
仁那は祖母宅の台所で、落ち着きをなくしていた。
立ったり座ったり。玄関まで行っては人影がないか、扉越しに目を凝らしてしまったり。
おかげで、玄関チャイムを鳴らす前の宅配業者を三度ほど驚かせた。
……荷物を受け取った後。玄関の花瓶をずらしては、また同じ位置に戻す。
そうこうしていると、予定の時刻ぴったりに玄関チャイムが鳴った。

残響が消えぬ前にインターフォンに駆け寄り、食い気味に「ひゃいっ」と返事をする。
『見学の予約をさせていただきました、松代と申します』
機械を通した声だったが、十分に男性的かつ美しい声だった。
丁寧な言葉遣いではあったが、自信がみなぎる声、あるいは命令を下すのが当然といった響き。
企業トップや代議士を生徒に持つ仁那に、相手がエグゼクティブであることを感じさせる。
仁那が玄関の戸を開けると……『シロさん』がこんな男性だったらいいな、と思い描いていたままの人物が立っていた。
大きい。
兄ほどではないが、この男もたっぷり百八十センチメートルはあるだろう。
しかししなやかで、鈍重さは欠片もない。男らしくも秀麗な顔立ち。
なにより、エリート然とした佇まいに、仁那は圧倒された。
時間が止まる。
彼女の全身全霊が、男の一挙手一投足を気にしはじめる。
確実に脳の動きは低下しており、呼吸を忘れていた。
「仁翔先生ですか」

「あ、はい」

しかし、彼女のそんな態度を松代は、美形と見れば騒ぐ、軽い女性と思ったのかもしれない。す……と、目が冷酷になる。

彼が仁那からさりげなく視線を外したことにより、自分が松代という人物の最初の関門から締め出されたことを知った。しん、と体が冷える。

（そうだろうな。わたし、男受けしないし）

男の値踏みの視線に憤りを感じることもなく、彼女は内心思う。

おまけに今の自分が着ているのは、墨が飛んでも目立たないように、墨染の作務衣である。

この格好と、純和風な家屋や彼女の雰囲気から『寺の別院と尼僧』と、周りにはかなりの確率で勘違いされる。

普段なら、自分に関心を持たなかった男にほっと胸を撫で下ろすところだ。

地味ないでたちは、彼女にとって鎧なのだから。

しかし今日はどうしてだか、もっと華やかな格好をしていればよかったと後悔してしまう。

（……しっかりしろ、わたし）

自分を叱る。二度と男の目を気にして右往左往しないと決めたのだ。いまさら落ち込

む必要なんてないと思うそばから、胸がしくしくと痛む。

だが、その時間はほんのわずかだったらしい。

「初めまして、松代武臣と申します」

ビジネスライクに名刺を差し出され、はっと我に返った。

仕事ができないと思われては、まともに相手をしてもらえなくなる。

仁那は企業向けの仕事も受けているので、男性の門戸の狭さをよく知っていた。

「こちらこそ、初めまして。高坂流書道教室師範、仁翔と申します」

なんとか口ごもったりせず、松代の目を見て挨拶できた。

必要以上に踏み込まないのはマナーだ……と思いつつ、渡された名刺をまじまじと見る。

松代武臣。

仁那にとって、世界で一番カッコいい名前である。惚れ惚れしてしまう。

「……なにか？」

松代の名刺には会社名も肩書もない。名前と連絡先のみの、そっけないもの。

男のいぶかしげな口調に、自分が彼をチェックしていたのを悟られたらしいと気づき、仁那は慌てて取り繕う。

「あ、いえ。失礼しました」

彼女は笑みを貼りつけると、名刺をしまった。
「奥の座敷が教室となっています、こちらへどうぞ」
松代を家の奥へと誘導しながらも、仁那の背中は、数歩後ろを歩く男の気配を感じようとして敏感になっている。ふと。
『行動するときは人の目を意識して。すると、またたく間に美しくなるよ』
そんな、番組のプロデューサーの言葉を思い出す。
垢抜(あか)けなかったタレントがしばらくすると、芋虫が蝶に変態するように綺麗になっていく現象について、そう教えてくれた。
当時の仁那にはわからなかったが、今日になって理解した。
自分は今、猛烈に彼の視線を意識しまくっている。……残念なことに、緊張しすぎて、右手と右足が一緒に出ていたが。
息をするのもはばかられて、というより今までどうやって呼吸をしていたのかもわからない。
意識しすぎるあまり、走り出そうかと考えた。ちょうどそのとき、『廊下は走るな』との貼り紙が目についた。
(誰だ、こんな標語を廊下の壁に貼ったのはっ！　わたしだ！)
セルフツッコミをしながら、仁那はギクシャク歩く。

ようやく目的地に着いたときには、八時間くらい続けて労働したような気分だった。
思いきり深呼吸しようと口を開けた瞬間、後ろで息を呑んだ気配がある。
「……これは、……見事ですね」
遅れて松代の感嘆の声が聞こえてきた。
亡き祖母自慢の桜達である。
七分咲きくらいの山桜の古木を中心に、まだ蕾のソメイヨシノや八重桜が美しく枝を伸ばしていた。
中でも山桜は、道行く人が塀(へい)越しに写真や動画を撮るほど、近所では有名な樹だった。
青空を背に、薄く色づいた花びらが舞い落ちる。
木全体が花嫁のヴェールのようにかすみ、風に吹かれてはそよぐ。
花びら一枚一枚に太陽の光が当たって、ここぞとばかりに命を燃やしているように見えた。
「祖母が……先代の師範が、教室を開くにあたり『綺麗なものを見て心が洗われれば、書に入りやすいだろう』と、この部屋を使うことにしたそうです」
説明する声が、つい華やいだ。
教室は墨を混ぜ込んだ漆喰(しっくい)の壁と枯草色(かれくさ)の琉球畳(りゅうきゅう)が敷かれただけの、二十畳ほどの部屋だ。

庭に目がいくように、あえて室内はシンプルにしている。静謐さと落ち着きがありながら、開放感もある。

松代が桜から目を離さないまま、呟く。

「迷い込んだ深山の中で桜を独り占めしているような錯覚を抱きますね」

「そう！　そうなんです」

「茶を点てたり、和楽器をメインにした演奏会にもいいですね」

松代の言葉が仁那は意外だった。

服装のセンスがいいから、彼は美意識が高いんだろうなとは思った。しかし彫りの深い容貌から、趣味はと訊かれたら洋風な音楽やスポーツを並べそうだと想像していた。

彼の着眼点が、自分の考えていることと同じだったのが嬉しい。

祖母宅のよさを知ってもらうためにゆくゆくはミニ演奏会などを催したいと思っていた仁那は、一気にこの人物に好感を抱いた。

彼女はニコッと笑う。

「手前味噌になりますが、催し物映えする場所だと思っています」

そんな仁那を見て、松代がふ……と微笑んだ。

お互いに緊張がほぐれたところで、仁那はうっかり訊ねてしまう。

「あの、もしかしたら松代さん、高校は東第一高等学校ですか？」

そう質問した途端、松代の表情にかすかな警戒の色が浮かんだのを、彼女は見逃していた。

「……そうです」

確信する。やっぱり、この人が『シロさん』だった。

舞い上がった彼女は『他人に踏み込みすぎない』という自分ルールを忘れた。

「和登から聞いてはおりませんが、松代さんは『文房四宝』から紹介されたのでしょうか？」

硯・墨・筆・紙。音でしかない記号を、文字として世界に留めておくための道具を『文房四宝』と呼ぶ。

仁那の兄、和登が継ぐ店の屋号でもあった。

「いえ」

「では和登個人からですね！」

彼女ははしゃいだ声を出した。

「クロは俺の親友です」

（そうでしょうとも！）

知らないなどと言われたら、仁那はがっかりしてしまっただろう。

「お噂はかねがね、和登がお世話になっています」

仁那は頭をぺこりと下げながら、ワクワクしていた。
彼は兄のことを『クロ』と呼んでいるのか。
松代の『シロ』、袋田の『クロ』。それでいけば、自分も『クロ』だ。
嬉しくなる。自分も交ぜてほしい。
仁那ははしゃいで言葉を続けた。
「……あの、松代さんのことは『シロ』と呼んでいるのだと、和登から――」
「申し訳ないが。あなたが奴の恋人でない限り、初対面の方から愛称で呼ばれたくはありません」
ぴしゃりと言われて、男に親しげな様子がまったくないことにようやく気がつく。
仁那はびくりとして、松代を見つめた。
男も彼女をじっと睨んだまま、一言も発しない。
しまった。初対面の相手に対して距離感を間違えた。
謝らなければ。しかし、なんと言えばいいのだろう。
必死に考えているうちに、仁那は無意識に松代から視線を外していたらしい。
「仁翔先生」
声をかけられて、初めて自分が視線を泳がせていたことに気がつく。
慌てて彼を見ると、仁那の動きに合わせて松代が表情筋を緩めた。はっきり、ビジネス用だとわかる笑みを向けられている。……逆鱗に触れたと思ったときよりも心が冷えた。

「すみません、奴と俺だけの特別なあだ名なんです」
柔らかい、それでも拒絶の言葉。痛い空気の中、なんとか仁那も持ち直す。
「……そうなんですね、申し訳ありませんでした。あの、和登は恋人ではないんです、わたしの」
双子の兄なんです、と言う前に、松代がさりげなく言葉を挟んでくる。
「その代わりに、あなたには『武臣』と呼んでいただきたいな」
「え？」
仁那が訊き返すと、彼は悪戯（いたずら）っ子のように目を煌（きら）めかせた。
男の豹変ぶりに仁那が戸惑っているのを、松代は気にした様子もない。
持参したブリーフケースから、出力してきたらしい用紙を取り出す。
……プライベートなことは話したくないらしい。もしかしたら、和登が松代の情報を漏洩しなかったのは、この男性の気質を汲んだのかもしれない。
で、あれば。彼に合わせようと心に決める。
彼は兄の親友である前に、自分の生徒になるかもしれない人だ。いわば、取引先である。
仁那が仕事モードになったことを察したのか、松代は用紙の必要と思われる箇所を指

しながら話しはじめる。
苛烈だった反応が嘘のように穏やかだ。
「こちらの教室のホームページを確認したら、大人向けカリキュラムには、ペン習字コースや記帳コースもありましたね」
「はい」
「どれも魅力的なのですが、急ぎなので、社用で使う揮毫だけを練習したいです」
普通に話してくれる彼に合わせ、ビジネスライクな声を出すよう、努力する。
「わかりました。練習したい題目がありましたら、持ってきてください。週に一回二時間。月四回で一万円のコースとなります」
紙のサイズが異なれば同じ文字でも、大きさの配分が違ってくる。
松代が言う通り、実際に使うサイズで早めに慣れたほうがいいだろう。
「お願いします」
松代が頭を下げる。用紙を見ながら彼はあらためて希望を述べた。
「それと、花押を」
……彼の家は政治家なのだろうか？
他に書道や花押が必要な職業を、仁那はすぐには思いつけない。
質問してみたいが大人には色々な事情があるし、また失敗して世界ごと閉ざすような

態度をとられたくもない。我慢して、事務的な話を続ける。
「花押については、わたしのほうでデザインのアドバイスや書き順のレクチャー、完成したデザインの登録まで可能なんですけれど……別料金となります」
「ホームページで確認してあります。承知しています」
申し訳なさそうな彼女の言葉に、松代はしっかりとうなずいた。
「花押に用いるのは大体、名字や名前から一字です。あるいは好きな字を使えますので、授業に入る前に考えておいてください」
ほっとして、仁那は続けて説明する。
「次はお道具ですね。こちらが初心者用のセットです」
仁那はストック棚から新品の道具セットを取り出し、正座した大人の膝がぶつからないくらいの高さの文机も設置する。
松代は、目の前に出された道具をじっと見つめていた。
なにか好みがあるか、と確認すると松代は首を横に振り、勢い込んで訊ねてくる。
「このセットの料金を教えていただけますか」
仁那が値段を告げると松代は目を瞠った。
「そんなに安いんですか？」
予想外に驚かれたので、仁那は笑ってしまう。

「これ、教材ですし」
「でも、クロの店で売ってるのはもっと高いです」
松代は、あまりの安さに信じられないようだ。店の商品を引き合いに出されて、仁那は納得する。
「シ……松代さんは、『文房四宝』にいらしたことがあるんですね」
なにげなく呟いたのだが、松代の目が再び剣呑になる。
これも地雷らしく、仁那は戸惑った。今のは普通の対応の範疇だったと思うのだが。
「あの……？」
「魅惑的な女性から他の男の話を聞くと、ヤキモチを焼いてしまうんですよ」
「まあ」
仁那は男の言動が儀礼的なものであるとわかっているので、曖昧な笑みを浮かべた。
松代という男は見た目より軽い人物かもしれない。
そう心に留めながら、平静を心がけて話す。
「あの店は初心者向けというよりは、深い趣味にしたい人とか、道を極めたい人向けです。どの世界でも、ハマれば際限はないですから」
「なるほど」
今度ばかりは松代も穏やかに同意してくれた。

「申し込みフォーマットには、習いたい理由として『仕事で使うため』と記入されていましたが、実際にはどれくらいの大きさの用紙に書かれるんですか？」
彼女の問いに、松代はしばらく考えたのちに、これくらいと両手を広げてみせた。
「……聯落で大丈夫そうですね」
仁那は紙を置いてある棚から、一番大きな紙を四分の三サイズにカットしたものを取り出し、松代に提示した。
「そう、こんな大きさです！」
松代が目を輝かせる。
続いて仁那は、別のストック棚から、一際大きな下敷きを取り出して広げた。
「初心者用セットの下敷きは、半紙用がデフォルトなので交換できません。申し訳ないですが、全紙用の下敷きと紙代は別料金となります」
松代はうなずいた。
「セットの筆は、兼毫で中鋒を選んであります」
これは中くらいのサイズの筆なので、松代が書きたいものによっては大筆を別途購入してもらう必要がある。
しかし、己の名前を書くときにも使えるので無駄にはならない。
「……ケンゴウ？　チュウホウ？」

仁那の言葉を、松代がロボットのように繰り返す。
「筆の硬さと長さです。兼毫は兼毛とも言って、色々な動物の毛をミックスしてあります。硬くもなく柔らかくもない、中くらいです。長さも中くらい、というのが中鋒です」
松代は納得したようで、こくりとうなずいた。
その姿が初めて習う小学生達とあまりに同じなので、仁那は噴き出しそうになる。
いけない、今笑ったら松代は拗ねてしまうどころか、ここで学ぶことすらやめてしまうかもしれない。
イ　ヤ　ダ
この人が自分でない誰かから書を学ぶのも、彼がいなくなってしまうのも耐えられない。……瞬時にそこまで考えてしまった自分に驚きながら、彼女はなんとか澄まし顔と口調をキープする。
「では、見学記念に墨をすってみませんか？」
仁那が言うと、松代が固まった。また、NGワードでもあったのだろうか。
（シロさぁん、なんでもかんでも引っかかるのやめてください、進まないんですけど！）
仁那は泣き言を言いたくなった。
けれど、男が自然解凍するまで待っているわけにもいかない。
「あの……？」

遠慮がちに声をかけると、彼は逡巡し、ようやく意を決したように言った。
「墨汁ではないんですね？」
「わたしの教室では、墨をするところから始めます」
凛とした答えを受けて、松代は諦めの表情になる。
「……わかりました」
少しばかり力を失った声だったので、意地悪した気分になってしまう。
仁那は気弱になって、主義を変えて松代以降は墨汁ＯＫにしたほうがいいかもしれないと思いはじめた。
けれど松代が書くとき、いつも墨汁が用意されているとは限らない。
やはり、仁那のカリキュラムに早めに慣れてもらったほうがいい。
気を取り直して、松代が買うのと同じ初心者セットから筆と硯、筆置きに水差し、固形墨を取り出す。
彼が右利きか左利きか聞いて、文机に配置した。その間、松代は仁那の手元から目を離さない。
（じっと見ないでぇぇぇ！）
またしても仁那は心の中で悲鳴をあげた。
松代から注がれている視線で手に穴が空くんじゃないかと思うし、体は熱くなって

いる。
（作務衣の背中に汗染みができていたらどうしよう！）
今度は冷や汗が噴き出してくる。
暗色系は濡れると意外と目立つ。今度から授業用も白いのにしようかな、と考えるが、そもそも暗色系を着ている理由を思い出し、慌てて打ち消す。
松代に指示して、墨堂に水差しから五百円玉大の水を入れてもらっているあたりから、仁那は平常心を取り戻してきた。
緊張の面持ちで固形墨を持った松代に、穏やかに声をかける。
「円を描くように。一ヶ所だけすると硯がすり減るので、まんべんなく。墨を支える指にはあまり力を入れず、優しく」
男が彼女の指示通りに手を動かすと、みるみるうちに水が墨汁になっていく。
「……おお！　墨色になりますね」
先ほどとは打って変わって松代が興奮した声をあげた。
子供らと同じ反応に、仁那はますます落ち着いてくる。
「墨をするところ……墨堂に、こまかな凹凸……鋒鋩ってものがあるんですけど。そこの具合がいいと、いい色にすれるんです。……書家はそういう状態を『墨がおりる』と言います」

「小学校のときは、こんなに楽じゃなかった」
大の男が拗ねたような口ぶりだった。
こっそり見ると、ふくれっ面である。きゅううううん、と仁那の胸のあたりで音がした気がする。可愛い。よしよしと、頭を撫でたいくらいだ。
……同い年の男をつかまえて、こんな感想もどうかと思うが。
「それは」
仁那はくすりと笑ってしまう。
「硯よりは、すり手側の問題ですね」
「……というと？」
「墨の角度は垂直よりは少し寝かせて」
ごく自然に墨を持つ彼の手に自分の手を添えてしまってから、びくりとした。
が、慌てて引き剥がすのも変なので、このまま続ける。
「ええと」
仁那は話を戻しながら、声が震えていませんようにと祈る。
「海……墨池とも言いますけれど、そこに水をどばっと入れませんでした？」
硯の、一段深くなっているところを指す。
「入れました」

聞けば、自信たっぷりに返事がある。正解と信じて揺るがない、松代の表情。
おかしさをこらえて、仁那はさらに訊ねた。
「そこから水を墨で、墨堂（ぼくどう）——陸とも言うんですけど——に持ってきて、ゴリゴリとすり鉢とすりこ木のように擦（こす）りませんでした？」
「……しました」
あれ、間違ってた？　と不安げになってきた松代に、仁那はダメ押ししてみた。
「さらには、なかなか色がつかないから焦れて、海の中で墨をこねくり回したりとか」
彼女が頭の中の風景を言葉にすると、松代は見事に肩を落とした。
きりりとした大人がしょげているのが可哀想で、つい、励ましてしまう。
「みんなするんですよ。もちろん、わたしもしました」
「先生も？」
「はい」
「それを聞いて、ほっとしました」
安心した、という笑みに見惚れそうになり、仁那は息を吸って気持ちを整える。
ちらりと時計を見ると、結構時間が経っていた。申し込むか否かを確認しておしまいにしよう、と考える。
「仁翔先生。お近づきのしるしに食事でもいかがでしょうか」

唐突に、松代が人を魅了する笑みを浮かべて誘ってきた。
「え？」
彼女はすぐには反応できない。
嬉しいが、どうして自分なんかを誘うのだろう。
……多分帰国したばかりで、日本にデートする相手がいないからだ、と思いつく。
要は仁那だから誘ったのではなく、誰でもいいのだ。
（ひどい、サイテー。自分でイケメンなことをわかっているチャラ男！）
落胆した自分を誤魔化すよう、松代を軽蔑してみたが。……むしろ彼がそういうタイプでなければ、自分が食事に誘われることはなかったのだ、と思い直す。
人生でたった一度の時間を楽しめばいい。
「今日と明日、仁翔先生はお休みだったと確認しています」
グラリとかしいだところに畳みかけられた。
「あの」
（どうしてわたしの休みを知っているんですか。それは訊いても許される？　……まさか、彼はわたしのストーカー？　いやん、嬉しい）
そう舞い上がりかけ、ホームページにばっちり載せてあるのを思い出した。ガッカリする。

「休日だったのを俺のために使ってくださってるんですよね。だったら俺がこのままあなたを借り切っても問題ありませんね？」

松代がよどみなく話し続けるので、仁那は異議を差し挟むことができない。

一歩下がれば、距離を詰められる。彼の虹彩がどんどん大きくなっていく。

松代が甘く、それでいて誠実な眼差しで仁那の瞳を覗き込んできた。

目の前の男は押しが強いが、初恋フィルターのせいで、素敵でカッコいい男性としか思えない。……我ながら、どれだけ男性に免疫がないのだろう。

しかし、美形男子は幼い頃から和登で、最近ではＴＶスタジオでも見慣れているではないか。

松代に意識を持っていかれないよう、仁那は必死に他のイケメンのことを考える。

……結果、わかってしまった。タレントらは松代のようにぐいぐい踏み込んでこない。

なによりも袋田仁那、自分自身が松代を警戒していないのが一番まずい。

なぜ男嫌いの自分が、彼だけは心の中に招き入れてしまっているのか。

疑問と同時に解答が浮かぶ。松代だからだ。

他ならぬ仁那自身が、彼を兄と同じくらい近しい男性と認識しているからだ。

わかってしまえば、あとは危機感が募るだけ。

（お願いだから近づかないで。あなたに近づかれると、わたしはパニックのあまり暴走

してしまうから！）

仁那が必死に願っても、じわじわと彼の双眸が彼女の意識を占めていく。

彼の瞳を覗き込んではだめだ。わたしを見る目つきに意味があるのかないのか、知りたくない……！

まぶたを閉じるとより危険な気もしたが、仁那はしっかりと目を瞑ってしまった。

耳も塞ごうかと考えたところで、松代が気になる言葉を告げた。

「書道を習うことには、俺のこれからの人生がかかってるんです」

……まぶたを薄く開けて、松代を見る。

仁那の感情の揺れなど気にしていないようで、彼女の手を握ってきそうな熱っぽさである。

（そんな大袈裟な）

芝居がかっているなぁと思わないでもない。

「いわば、書道教室選びが俺の命運を握ってると言っていい」

彼がなにを言っているのか、仁那は理解できない。

自分が、作り物のように美しい松代の唇の動きに見入っているのがわかる。

けれど目を逸らせない。……松代が、勝利を確信しているんだろうな、とも考える。

「ビジネスでは顧客に請負業者を見極める権利がある。仁翔先生にとって、俺がクライ

アントで間違いないですね？」
仁那は、男の魔力に屈しつつあった。
「はい……」
「決まり」
強引に立たせられ、肩を抱かれる。
男の手の熱さが、彼女を現実に引き戻した。
「あのっ、困ります、わたし……っ！」
「入会前ですし、賄賂などと思わず」
「一人の生徒さんを特別扱いできませんし、世間の目がありますので！」
本音は行きたい。
が、松代は通り過ぎる者で、仁那は留まる者だ。ご近所の方々が仁那を見る目は、好奇心半分と非難半分になるに違いない。
仁那の反論に、松代は優雅に肩を竦めた。
……他者が行えば胡乱な目で見ること確実なのに。
悔しいが、松代だとかっこいいと絶賛してしまう自分がいる。
（この人、絶対自分の魅力をわかってる！　サマになりすぎて、いっそ腹立たしい）
「オフの日に誰と出かけようが、仁翔先生の勝手だ。なのにあなたは頑なすぎる。そう

やって、今まで色々なことを諦めてきたのかな」
独り言めいているが、仁那への問いかけである。
ぎくり。彼女は体を強張らせた。
（この人はいったい何者なんだろう。会って間もないというのに、どうしてわたしのことがわかるの？）
仁那の警戒心が一気にＭＡＸになる。
和登から自分のことを聞いていた？
だとしたら、共通の話題である兄についてあんなに拒絶した態度はとらないだろう。
……松代はあからさまに和登のことを語り合いたがらない。
そのくせ、仁那にはぐいぐいと攻め込んでくる。
ふと、怖いことを思いついた。
仁那が紫藤瑞葉だと知ったうえで自分に話を合わせているだけだとしたら？
ぞわぞわと鳥肌が立つ。
……以前、「仕事で使うので」との理由で、個人授業を申し込んできた成人男性がいた。
平日の昼下がりで油断もあったのだろう、教室へ案内しているときにガバリと後ろから抱きつかれた。そのときはたまたま和登が祖母宅の庭仕事を手伝ってくれていたので、ことなきを得た。

以来、成人男性の個人授業は行わないようにして、どうしてものときは和登に立ち会ってもらっている。

……なのに、『シロ』と同姓同名というだけで浮かれてしまい、和登に連絡もしないまま男を招き入れてしまった。

仁那は自分の馬鹿さ加減にようやく気づいた。

見ず知らずの男性と二人きりであることに恐怖心が湧いてくる。

「ねえ、仁翔先生」

いきなり耳元に唇を寄せられた。

体が跳ねた。この男は気配を殺しすぎる。怖くて顔を見ることができない。

「あなたのなりたいものはなに？」

松代が熱く、掠れた声を出す。

「人生の勝者だろう？　……俺もそうだよ」

男の声が、仁那の耳をなぶる。耳が歓ぶ。

背筋にざわっとしたものが走り、脳が侵されていく。

催眠術をかけられるときはこんな感覚だろうか。

「勝者とはなにか。仕事での成功もそうだけど、俺はなにより、愛する人を手に入れることだと思っている。当然、身も心もだ」

言葉にかすかに滲むうさんくささが、低くセクシーな響きに甘くコーティングされて、脳内に押し入ってくる。

……なぜか。この男と睦み合っている自分を想像してしまう。

朧月夜の教室で。仁那は桜を愛で、彼女自身は男に可愛がられている姿を。

彼女が息を呑んだのを、松代は見逃さない。

「あなたも、男を手に入れられる女性になりたいんじゃないのか？」

松代がたらたらと毒を垂れ流してくるのに、仁那は必死に抗う。

「やめてください」

幸せを諦めて閉ざした扉を、こじ開けないで。

「俺が唆しているんじゃない、君が欲しているんだ」

「っ、だからっ。わたし好みの声で至近距離でささやくの、やめてくださいってば！」

「仁翔先生、バカなの？　そんなことを言われたら、男が引くわけないでしょう」

松代からふ、と艶やかな笑みを向けられ、仁那の意識が飛びそうになる。

今のは冷笑で、わたしはバカにされているんだと、仁那は自分を叱る。

（なのにうっとりしてしまうなんて）

いくらイケメン好きだからって、我ながらチョロすぎだ。

「色魔退散！　体に鎧、心に剣山！」

内心で必死に唱えていたら、松代がくくく……とおかしそうに肩を震わせた。口に出ていたらしい。

真っ赤になりながら仁那はなおも戦いを挑む。

「そうだ、松代さん。実はあなた、結婚詐欺師ですね？」

聞いた途端、松代はこらえきれなかったようで、ぶはと噴き出した。

自分では核心を突いたと思ったのだが、トンデモ発想だったのだろうか？

「なんでそんな発想になるのかな」

笑いすぎて涙を拭う姿が、またかっこいい。

「だって」

冴えない女が一軒家で一人で仕事していて、小金持ちとでも思われたんだろう。

「ねえ。仁翔先生って、ユニークって言われるでしょう」

男の言葉に仁那はムッとした。

「おあいにくさま、この家の所有者は母ですので！　わたしを口説いても一円も入ってきませんからっ」

……我ながら、言っていて悲しくなる。

「ハズレ。あなたを口説きたい男ではあるけれど、結婚詐欺師ではないですよ。この家の資産価値はそこそこだと思うが、俺は金には困っていない」

「……だったら。なんで松代さんはここにいるんですか」

書を習いに来たとか言うくせに、人を口説くような男の言動に仁那はすっかり困惑していた。

突然、がし、と肩を掴まれた。

「たくさんの書道教師の中から、あなたを見つけた」

松代の顔からは仮面が剥がれ、必死さが溢れている。

ドキドキしている自分の鼓動を感じながら、仁那は目をしばたたかせた。

彼女が松代の出方を窺っていると、男は辛そうに声を絞り出す。

「……俺は字が下手で、他人はもとより自分でも読めない。特殊学級も検討されたことがある」

仁那の沸騰しそうだった頭の中が一気に冷えた。

……挫折など知らないような男が、知り合って間もない人間に劣等感を曝け出すのは、どれだけ勇気がいることなのだろう。

仁那の心が同情に傾く。

「色々な書道教室の評判をチェックした。生徒や親からの評価を読んで、あなたに習うことを決めた。俺はこれから生涯を懸けた仕事に就くつもりでいる。だが、書道ができなければ、俺には資格が与えられない」

どんな仕事なのだろうと再び思ったが。
松代の必死な表情に、彼が『目指しているなにか』のために仁那が必要である、と思い詰めているらしいことはわかった。
道が交わらないはずの自分達は、彼が望んだから出会えた。
仁那は自分が堕ちたことを知った。渋々了承する。
「……松代さんの入門を許可します」
ほっとしたらしく、男はニッと笑った。
その様はまるでスコールが去った後の晴天のようで、いささか唐突すぎる。
「もしかして、わたしのことハメました？」
じとぉ～と男を睨みつけるが、しれっとのたまう。
「人生を賭けた大博打の相棒にあなたを選んだのも本当。親交を深めるために、仁翔先生と食事をしたいのも本当」
ダメ押しとばかりに、にこっと微笑みかけられる。すると、仁那の心臓は簡単に高鳴ってしまう。
「いや、それとこれとは」
自分は書を教えることを了承しただけで！
「早い時間に送り届けますから、大丈夫ですよ」

立ち読みサンプル
はここまで

仁那の態度が軟化したことを察知した後は、強引だった。
「ちょっと、松代さん？」
男はタブレットを取り出し、操作しはじめる。やがてマイク付きのイヤホンを耳に差し込んだ。
漏れ聞こえる内容から、あちこちに連絡してなにかを予約しているらしい。
仁那は手元のそれを奪おうと飛びかかったが、あっさり躱された。
そればかりか、身動きできないよう羽交い締めにされる。
ま・つ・し・ろさん！
身振り手振り口パクで抵抗したら、彼は失礼と電話相手に断って仁那に向き直った。
「大人しくしてないと、おしおきするぞ」
男は言い捨てると、通話を再開する。
「なっ……！」
漫画の中の、俺様主人公のような台詞だ。
仁那がときめいている間に、男は手配を済ませたらしい。
ブリーフケースにタブレットをしまうと、松代が仁那の顔を覗き込んでくる。
「かなり強引にお願いしたので、行かないとなると相応のキャンセル料が発生するようです」